

## 平成24年度愛媛大学大学院入学式 式辞

本日ここに平成24年度入学式を挙げるにあたり、愛媛大学を代表して皆さんの大学院への入学を、心から歓迎いたします。

この大学院入学式のために、ご臨席を賜りましたご来賓、ご家族をはじめ、関係の皆様に、深く感謝申し上げます。

今年度、愛媛大学大学院に入学された方々は、大学院博士課程では、医学系研究科博士課程と理工学研究科博士後期課程に40名、大学院修士課程では、法文学研究科、教育学研究科、医学系研究科、理工学研究科博士前期課程及び農学研究科に391名の皆さんであります。この他に、愛媛大学には、香川大学、高知大学と共に構成する博士課程の連合農学研究科がありますが、来る4月16日に入学式を行い、31名を迎えることになっています。

皆さんの中には47名の社会人学生、18名の海外からの留学生が含まれています。これらの方々は学業以外の面においても多くのご苦労があることと思います。困難をいとわず学問に挑む皆さんの高い志をたたえるとともに、試練を乗り越えて、所期の目的・目標を達成されることを願っています。

愛媛大学の各研究科においては、この数年間、大学院課程のカリキュラムの改革に取り組んでいます。修士課程においては、修士論文作成のための勉強だけでなく、広い分野の基礎的な知識や技術を修得するためのコースワークが導入されています。広い知識基盤のもとに、専門領域の最先端の諸課題を理解し、その学術的な位置づけと動向を把握することが求められています。

博士課程においては、将来、大学や企業などの研究機関において研究者として活躍することが期待されます。そのためには、自分の目標をもつこと、しかも大きな目標をもつことが大事です。そして、その目標を実現するために、着実に徹底した日々の研鑽が必要です。そして、必要とあらば国内外を問わずどこにでも出かけて教えを乞い、自分の研究能力を高めていただきたいと思います。

修士課程であっても博士課程であっても、皆さんに是非身につけてもらいたいのが、社会的な能力、すなわち、社会力（ソーシャル・コンピテンス）です。社会力にはコミュニケーション力や協調性やリーダーシップのほか、「人と良好な関係を築くことができる能力」や「人と協力しながら物事を成し遂げる能力」などが含まれます。このような社会力は、実社会に出たときに必要なだけでなく、自分の研究レベルを高めるためにも必要です。皆さんはすでに何度も経験していると思いますが、自分で理解しているつもりでも、人と議論を交わしたり発表したりした時に実はあやふやな理解しかしていなかったことに気付くことがあります。自分の理解を深めたり、新しい発想を得たりするためには、人との意見交換や徹底した議論が不可欠です。そのような意味において、研究

は個人的な営みであると同時に、すぐれて共同的な作業でもあります。皆さんはそのような機会をなるべく多くもつために、研究室やゼミでの発表や討論だけでなく、学内外での交流、国内外での学会発表などに積極的に取り組んでいただきたいと思います。

さて、愛媛大学は8年前の平成16年度に法人化し、国立大学法人となりました。法人化のメリットは大学の自主裁量権が拡大されたことです。愛媛大学は自律的な運営によって、教育、研究、社会連携、国際連携において特色ある優れた大学にするために、改革を押し進めてきました。私たちの目標は、「学生中心の大学」、「地域にあって輝く大学」、「地域から世界に発信する大学」をつくることでもあります。

学術研究面では、大学全体が高いレベルの研究を推進するとともに、環境、生命の分野において、卓越した研究グループを中心にいくつもの先端研究センターを設置し、その研究成果を世界に発信してきました。

本学で最初に設置した沿岸環境科学研究センターは、田辺教授を中心に化学物質による地球規模の環境汚染や生態系汚染の実態解明や過去の復元、将来予測に取り組んでいます。地球深部ダイナミクス研究センターでは、入船教授を中心に高温高压実験による地球内部物質の探査および数値計算による地球深部の構造と物性の探査によって世界トップレベルの成果を上げています。同時に、超高压装置を使って天然のダイヤモンドより硬い直径1センチのナノ多結晶ダイヤモンドを合成することに成功しており、すでにその実用化・商品化が実現しています。無細胞生命科学工学研究センターでは、タンパク質分子を試験管の中で自由自在に合成する実用的な手法（無細胞タンパク質合成系技術）を遠藤教授が世界に先駆けて開発しました。この技術は生命科学分野の世界標準技術として確実に広がっています。

本学にはその他にも特長のある先端研究センターがあります。宇宙進化研究センターは、ブラックホールの形成と進化など宇宙の進化に関する研究に取り組んでいます。東アジア古代鉄文化研究センターは、中国の古代製鉄遺跡の発掘を行い、東アジアにおける鉄文化の変遷を研究しています。また、プロテオ医学研究センターは、ゲノム情報とタンパク質情報とを一体化したプロテオ医学研究を軸に、自己免疫疾患や生活習慣病など人類が抱える難病の克服に取り組んでいます。

愛媛大学にはそれだけでなく、地域に密着した研究センターもいくつかあります。南予水産研究センター、地域創成研究センター、防災情報研究センター、植物工場研究センターがその代表的なものです。愛媛大学は大学憲章において、「地域の諸問題の解決に向けて人々とともに考え、行動し、地域社会の自立的発展に貢献する」と宣言していますが、これらのセンターはこれを実践しています。例えば、この入学式の後に講話を行ってもらった矢田部教授がセンター長を務める防災情報研究センターでは、30年以内に60%の確率で発生すると予想されている東南海、南海地震に備えて、国、県、市町と連携しながらネットワークを作り、県内の隅々まで防災キャラバンを派遣して地域防災力の向

上に努めています。

私がいま述べた先端研究センターや地域密着型の研究センターの教員のほかにも、愛媛大学にはさまざまな分野ですぐれた成果を上げている教員がたくさんおられます。皆さんが大学院修士課程あるいは博士課程において研究活動を始めに当たって、皆さんの先達であるこれらの教員から研究者としての姿勢を学んでください。先月3月に定年を迎えられた無細胞生命科学工学研究センターの遠藤先生は、先ほど紹介したように無細胞タンパク質合成系技術を世界に先駆けて開発されました。遠藤先生は、研究という漢字（研究の研は「研ぐ」、究は「究める」ですが、それを）を使って、「研究者は研究に没頭して自らを研ぎすまし、研究の道を究めなければならない」と説かれています。そして、「研究成果はあるに越したことはないが、それは単なる副産物である」と述べられています。

皆さんはこれから2年から5年間、自分の研究に没頭し、研究を究める機会が与えられています。もしかすると、これは皆さんの長い人生のなかで唯一の機会かもしれません。ぜひ高い志をもって学修と研究に励み、悔いのない大学院生活を送っていただきたいと思います。

今回、愛媛大学大学院に入学された皆さんが、将来、日本の未来、そして世界の未来を切り拓く有為の人材として、力強く社会に羽ばたかれることを祈念し、式辞といたします。

平成24年4月6日

愛媛大学長 柳澤 康信